群教セ	H01 － 01
	平 27. 257 集
	幼児教育

互いに認め合い、人との関わりを楽しむ幼児の育成

――異年齢の幼児と共に楽しみ、関わりが広がる遊びの工夫――

特別研修員　石井　薫

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

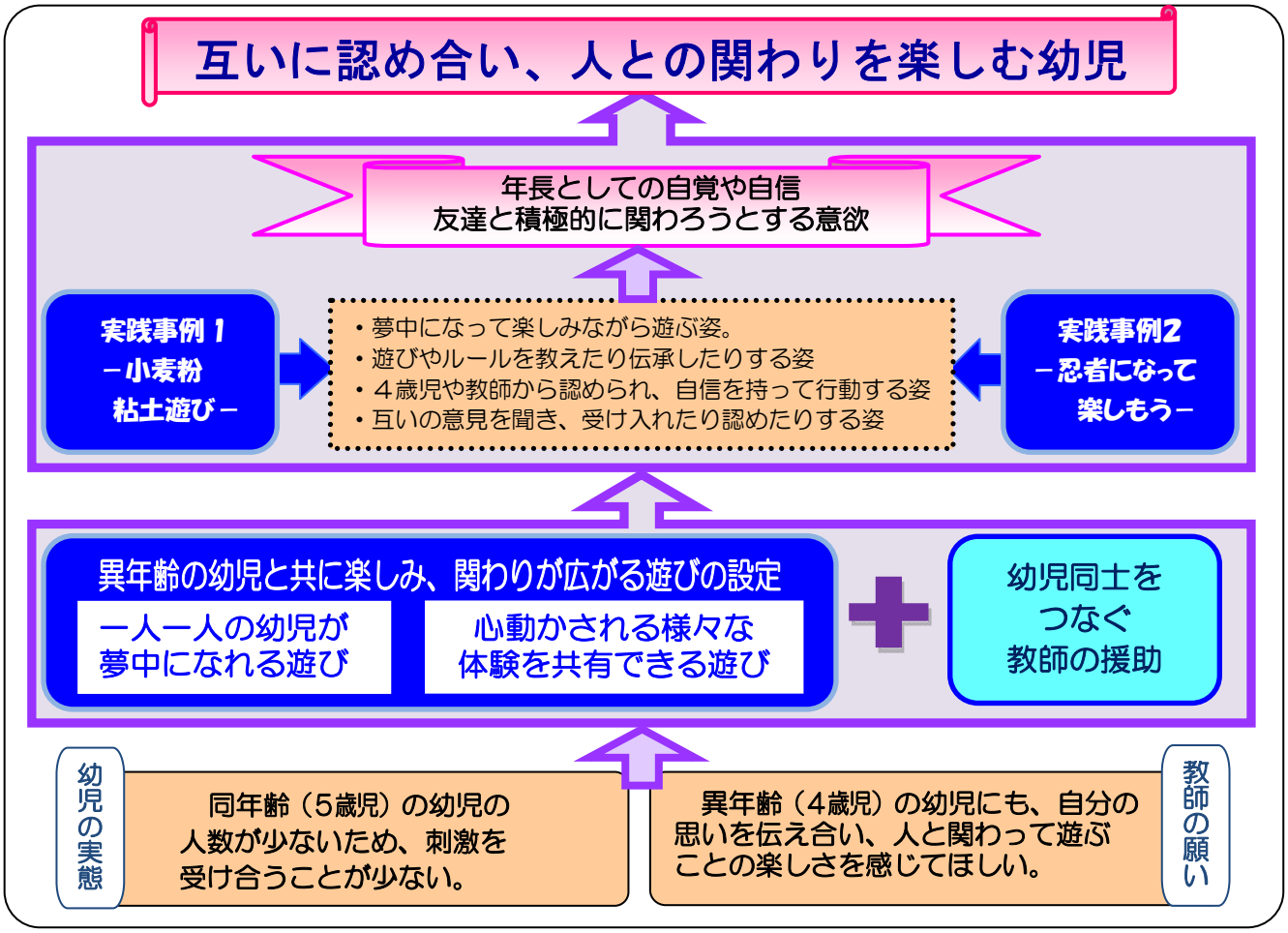
一人一人の幼児の発達は、幼児と教師とが共に生活していく中で促されていく。集団生活の中で幼児同士が互いに刺激を受け合い、影響し合いながら育ち合えるようにすることが幼児の成長に必要である。

本園は、本学級５歳児５名、４歳児８名、職員４名の小規模園である。自ら興味や関心を持ち、いろいろなことに関わろうとする幼児が多い。しかし、園児数の減少に伴い、同年齢の幼児同士が刺激を受け合い遊ぶ経験が乏しい傾向にある。そこで同年齢の友達との関わりを大切にしながらも、異年齢での遊びを意図的に設定することで､幼児同士の関わりが増え､育ち合うきっかけを作ることができるのではないかと考えた。

そのため、本学級の５歳児も共に遊ぶ４歳児も夢中になれる遊び、幼児が心動かされる様々な体験を共有できるような遊びを設定するとともに、友達と積極的に関わることができるよう幼児同士をつなぐ援助をしていくことで、年長児としての自覚や自信を持つことにつながり、互いを認め合い、人との関わりを楽しむようになるのではないかと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　保育改善に向けた手立て

幼児が夢中になって遊び、その遊びの楽しさを味わえるようにするとともに、同じ遊びに興味を持った幼児同士が関わり、友達への関心を持ち、友達関係が広がっていくようにしていきたい。

(1) 実践１における研究上の手立て（５歳児６月）

単元名　「感触を楽しみ、夢中になって遊ぼう―小麦粉粘土遊び―」

①一人一人が夢中になって遊んだり、友達と楽しさを共有したりできるような遊びの設定

・５歳児が自分たちで小麦粉粘土を作り４歳児へ知らせたくなるように、始めに５歳児だけで活動する時間を設定し、幼児が扱いやすい道具や試行錯誤して作るのに十分な材料を用意しておく。

・個々の幼児が自分の好きな遊び方や自由な表現ができるように、広いスペースを用意し、じっくり取り組めるよう時間を確保する。広いスペースの中でも友達の遊びを感じることができるように、みんなが集まって遊べる大きめのテーブルを配置する。

②それぞれの遊びを認め、友達の遊びに興味が持てるような言葉掛けの工夫

・幼児が自分の遊びを友達に知らせたくなるように、教師がそれぞれの遊びを認める言葉掛けをする。

・友達に関心を持てるように、具体的な場面を捉えたり実物を見せたりしながら、自分と友達の遊びの違いに気付くような言葉掛けをする。

実践１では、友達との遊びに関心を示して、自ら友達と関わって遊ぶ姿が見られたが、実践２では５歳後半の発達段階も考え、②の手立てを発展させ改善した。

(2) 実践２における研究上の手立て（５歳児１０月）

単元名　「友達と試したり工夫したりして遊ぶことを楽しもうーみんな忍者になって楽しもうー」

①様々な遊び方ができ、友達と心動かしながら体験を共有できる遊びの設定

・絵本や紙芝居、音楽などを用意し、幼児一人一人の忍者についてのイメージが膨らむようにしたり、友達と共通なイメージを持てるようにしたりする。

・５歳児、４歳児が共通に体験してきたことを遊びに生かせるように、これまで使ったことのある運動用具や遊具を見える場所に用意したり、それを利用した遊びを一緒に考えたりする。

・友達の遊びに関心を持ち、互いの忍者遊びがつながるように、忍者になりきって遊ぶ姿を教師が認めそれぞれの遊びの場所の設定に配慮する。

②幼児の思いを受け止め、幼児同士の思いをつなげるような言葉掛けの工夫

・友達に自分の思いや考えを伝えたり友達の思いや考えを聞いたりするきっかけとなるように、言葉掛けのタイミングに気を付け、教師の思いが出過ぎないよう言葉を精選するなど配慮する。

・幼児同士のイメージをつなげていけるように、幼児の思いに寄り添いながら友達の思いに気付いたり認めたりするよう言葉掛けを行う。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　４歳児との関わりを通して、５歳児同士も互いへの関心がより高まり、同年齢、異年齢、それぞれの幼児同士が友達の存在を意識し、友達と関わることを楽しむようになった。

○　５歳児は、４歳児と遊ぶ中で友達や教師から認められたり４歳児が憧れる存在になったりしたことで自信を高めた。また、友達を思いやる気持ちが強くなり、年長としての自覚も現れ、積極的に４歳児と関わるようになった。同時に友達の良いところに気付き認め合う姿が多く見られた。このことから、異年齢での関わりは幼児の成長を促すきっかけとなるものであることが分かった。

２　課題

○　異年齢での遊びに必要な環境を意図的、継続的に計画していくことや、人との関わりの中で、何が育つのかを考え、保育していくことが必要である。

＜保育実践＞

実践１

１　単元名　「感触を楽しみ、夢中なって遊ぼうー小麦粉粘土遊びー」（５歳児・６月）

２　本単元及び本時について

小麦粉粘土遊びは、異年齢の幼児が個々に楽しむことができるものであるだけでなく、幼児同士が関わり、イメージを広げ、遊びを継続、発展させていくことができるものである。教師は、幼児が楽しさを味わい、新たな気付きや発見につながるような材料を準備し、友達との関わりが生まれるような場や時間を確保するなどの環境の構成を工夫するとともに、それぞれの遊びを認め、友達の遊びに興味を持てるような言葉を掛け援助していく。小麦粉粘土遊びを通して、幼児が自由に表現する楽しさを味わい、その気持ちを周囲に共感してもらうことで、同じ遊びに興味を持った幼児同士の関わりが生まれ、人と関わって遊ぶことを楽しむ幼児の姿につながっていくと考える。

３　保育の実際

①事前の活動

環境の構成の工夫：幼児が扱いやすいように、材料を小分けにしたり、小麦粉、水、塩、油など小麦粉粘土の材料や分量を量る容器に目安となる印を付けたりして準備、設定する。

幼児の姿：５歳児は小麦粉粘土の作り方を知り、自分たちで材料を混ぜ小麦粉粘土作りをした。混ざり合ったときの感触を味わったり、小麦粉と水の量によって生まれる硬さの違いなどを発見したりした。何度も経験する中で手際よく小麦粉粘土を作れるようになり自信につながっていった。また、自分たちで作った小麦粉粘土を使って遊ぶことを楽しみにしていた。

②本時

本時	【手立て】①一人一人が夢中になって遊んだり、友達と楽しさを共有したりするような遊びの設定（Ｐ２Ⅱ－２　（１）①　参照） ②それぞれの遊びを認め、友達の遊びに興味が持てるような言葉掛けの工夫（◎）

幼児の姿　（○、大文字：５歳児、小文字：４歳児）	教師の援助（◎言葉掛けの工夫）
【５歳児が小麦粉粘土を作って４歳児を誘う場面】（図１・２） ○Ａ児、Ｂ児、Ｃ児の３人が小麦粉粘土作りを開始。 ○Ａ児が小麦粉に水を入れた瞬間、小麦粉が緑に変化。 Ａ児：「えっ！何で？」 Ｂ児：「えっ。すごい！こっちも入れてみるよ。」 Ｂ児が小麦粉に水を入れたら、小麦粉が黄色に変化。 ３人：「すごい。色が付いた。」 Ｃ児：「Ａ児とＢ児が水を入れたら緑と黄色になったんだよね。次は絶対赤だよ！じゃあ、水を入れるよ。」 小麦粉が、赤に変化した。 ３人：「やっぱりね！」「やった！当たった。」 ○Ｂ児が手にべっとりとくっついている小麦粉粘土をＡ児、Ｃ児に見せた。 ○Ｂ児：「はな組さん（４歳児）に見せてくる！」	・４、５歳児が共に楽しめるように、４歳児担任と小麦粉粘土遊びの取組方について事前に打ち合わせをした。 ◎周囲の幼児も気付くよう、教師も一緒に驚き、共感したり不思議がったりした。夢中で取り組んでいる姿を認めながら、互いの状況を知らせていった。 ◎「この手を見たら、はな組（４歳児）さんも驚くね。」と言葉を掛けた。

図１　小麦粉粘土に色が付き、驚いている場面

図２　５歳児が４歳児に小麦粉粘土を見せている場面

【色付きの小麦粉粘土遊びに４歳児が加わった場面】 ○Ｂ児を見て４歳児も興味を示し、遊び始めた。 ４歳児：「きれい！触りたい！」「へびみたい。」 「これウサギさん?!」「すごいね。」 ○Ａ児が色付きの小麦粉粘土を使い分けて動物を作った。 ｈ児：「どうやって作ったの？」 Ａ児：「動物の形にして、口とかは違う色で作ったよ。」 ○どの幼児も次第に言葉が減り、黙々と取り組んでいた。	◎感触を楽しむ、こねる、伸ばす、形にする、色を混ぜ合わせるなど、個々の幼児が楽しんでいる様子を見取り、共感したり、友達の姿を知らせたりする言葉を掛けた。
【５歳児と４歳児の関わりが増え、４歳児に教える場面】 ○５歳児同士で色付きの小麦粉粘土を交換し、違う色の小麦粉粘土を混ぜ合わせ始めた。 ５歳児：「色が変わった！」「もっと赤いのちょうだい！」 ｉ児：「やってみたいな。その粘土ちょうだい。」 ○ｄ児：「小麦粉粘土、どうやって作ったのかな？」 Ａ児：「小麦粉と水を混ぜるんだよ。あと塩も少しね。」 ○ｅ児は、小麦粉粘土が手に張り付き、困っていることを教師に伝えてきた。 Ｃ児：「持ってる小麦粉粘土で手に付いてる小麦粉粘土を叩いたりこすったりすると取れると思うよ。」 ｅ児：小麦粉粘土が取れ、ほっとした表情をしていた。 ○Ｃ児はｅ児の表情を見て、少し誇らしげな顔をしていた。困っていたｆ児にも小麦粉粘土の取り方を自ら教えに行った。	（図３・図４） ◎４歳児に、色を混ぜ合わせている５歳児の様子を知らせる言葉掛けをした。 ◎言葉や気持ちが伝わりづらい時には、言葉を補足し、伝えた。 ◎ｄ児が小麦粉粘土の作り方を知りたがっていたことをＡ児に知らせ、すぐに教えてあげられたＡ児を褒めた。 ◎Ｃ児からｅ児に教えて欲しいと思い、ｅ児が困っていることをＣ児に伝えた。 ◎優しくｅ児に教えていたＣ児の姿を認め、嬉しそうなｅ児にも「Ｃ児が教えてくれて良かったね。」とＣ児の優しさを再確認できるよう言葉を掛けた。

図３　小麦粉粘土の作り方を説明している場面

図４　手に付いた小麦粉粘土の取り方を教える場面

【教師の見取り】

・小麦粉に食紅を入れて色が変わったことで驚きや疑問などの気持ちが生まれ、夢中になって遊ぶ活動になった。さらに、見比べたり、気付いたことを話したりするなど、友達と関わるきっかけとなった。

・５歳児は、自分たちで作った小麦粉粘土で４歳児が楽しみながら遊んでくれたという状況が自信となった。また４歳児に教えたり面倒を見たりするなど関わりが増え、５歳児としての自覚が出てきた。

③事後の活動

環境の構成の工夫：本時に幼児が作ったパンやクッキーなどをトースターで焼き、部屋に飾っておいた。

幼児の姿：たくさん並んだ自分や友達の小麦粉粘土作品を見たＡ児が、お店屋さんごっこをしたいと提案しＣ児と二人でお店屋さんごっこを始めた。その姿を見た４歳児もお店屋さんごっこに参加した。Ａ児が遊び方や遊びに必要な物を考えて４歳児に伝え、お店屋さんごっこが続いた。

４　考察

○　５歳児が扱いやすく変化が分かりやすい材料にしたことで、幼児同士で試行錯誤しながらの小麦粉粘土作りとなり、５歳児同士の関係が深まった。また、食紅を事前に小麦粉に混ぜておき、突然色が変化するようにしたことで、幼児が心動かされ、興味が深まり夢中になって遊ぶことができた。

○　友達の遊びに興味を持てるような言葉掛けがきっかけとなり、友達の様子に気付き、様々な遊び方ができることを知り、友達に関心を持ったり、友達と積極的に関わったりする幼児が増えた。

＜保育実践＞

実践２

１　単元名　　「友達と試したり工夫したりして遊ぶことを楽しもうー忍者になって楽しもうー」
（５歳児・１０月）

２　本単元（題材）及び本時について

「忍者」は本学級のどの幼児も好きで、幼児にとってイメージしやすいものである。「忍者になって、楽しもう」という遊びは、自分なりのイメージを実現するために試行錯誤し夢中になって取り組める遊びになるのではないかと考えた。本単元を通して、５歳児同士が考えを出し合い目的を持って遊びに取り組んだり、４歳児も５歳児の遊びに興味を示し一緒に遊んだりすることで、人との関わりを楽しむ幼児の姿につながるであろうと考えた。

３　保育の実際

①事前の活動

環境の構成の工夫：幼児がイメージした忍者の衣装や道具作りに必要な材料、これまで使ったことのある運動用具や遊具を用意しておく。

幼児の姿：５歳児が忍者の衣装を着て修行の場を作り忍者修行を行った。４歳児も５歳児に修行の仕方を教えてもらい遊び始めると「年長さんみたいに忍者の服と刀が欲しい」と５歳児に要求した。５歳児が衣装や刀を作ってあげると４歳児はそれを身に付け忍者修行を楽しんだ。

②本時

本時	【手立て】①様々な遊び方ができ、友達と心動かしながら体験を共有できる遊びの設定 （Ｐ２　Ⅱ－２　（２）①　参照） ②幼児の思いを受け止め、幼児同士の思いをつなげるような言葉掛けの工夫（◎）

幼児の姿　（○、大文字：５歳児、小文字：４歳児）	教師の援助（◎言葉掛けの工夫）
【忍者の修行コースを作り、４歳児に教える場面】（図５） ○Ａ児はＢ児を誘い、忍者の修行コース作りを始めた。 ○積極的にアイデアを出していたＡ児の様子に、Ｂ児は戸惑いながらも道具を一緒に運んでいた。 ○フラフープの並べ方で意見がぶつかる。 Ａ児：「じゃあ、Ｂ児のやり方でいいよ」 ○コース作りが終わると、次のようなやり取りが見られた。 Ａ児：「みんなが修行をする前に、楽しいか試すね。」 Ｃ児：「すごいね！交ぜて。」 と遊びに参加してきた。 Ａ児：「いいよ！でもね、鉄棒と雲梯も修行に入れたくなったんだ。はな組さんも、鉄棒好きだし。」 Ｃ児：「そうだね。いいかもね！じゃあさ、これを鉄棒とか雲梯の方に運ぼう。Ａ児、手伝って。」 ○ｅ児ｆ児：「手伝おうか？」とＡ児Ｃ児の所へ来た。 Ｃ児：「じゃ、修行の準備手伝って。」 ○Ａ児Ｃ児が先頭で４歳児を誘導し遊び始める。	・４歳児担任と連携を図り、幼児同士の関わりを見取って必要な援助を行った。 ◎Ｂ児が戸惑った表情をしていたので、Ａ児に「Ｂ児が何か言いたそうな顔しているね。聞いてみたら？」と言葉を掛けた。 ◎Ａ児が自分の気持ちに折り合いをつけて、相手の思いを受け入れたことを褒めた。Ｂ児には、友達に受け入れてもらえた喜びを感じられるように言葉掛けをした。 ・園庭東に忍者の修行コースを設定したが、園庭西の離れた場所にある鉄棒や雲梯をどう修行のコースに入れたら良いかいい考えが浮かばずに遊びが中断していた。そこで、別のコースを作ったらどうかと提案した。 ◎「そら組（５歳児）さんが見本を見せながら、やり方を教えるといいかな？」と言葉を掛けた。

図５　５歳児が見本を見せ、４歳児を誘導しながら遊ぶ場面

【忍者リレーで思いを出し合う場面】（図６・図７）

○忍者鬼ごっこの休憩中にｈ児が忍者リレーを思い出し、教師に要求してきた。

○ｈ児：「忍者リレーしたいんだけど、いい？」
ｈ児なりに自分の言葉で友達に伝えていた。
４歳児５歳児：「いいよ、やろう！」

○Ｃ児：「僕がスタートやるよ！」
大きな声でＣ児が合図しリレーが始まった。

○ｄ児が青チームを作りたいと教師に伝え、青いバトンがないので教師と一緒に作り始めた。
ｄ児：「青チームができると楽しくなると思うんだよね。青チームも入れていいかな？」
４歳児５歳児：「いいね、やろう！」
自分の思いを受け入れてもらったｄ児は、嬉しそうな表情を見せ、一緒にリレーを楽しんだ。

◎自分の言葉で友達に伝えて欲しいと思い、教師と一緒に友達に伝えるよう「ｈ児の気持ちをみんなに言ってみようか？」と言葉を掛けた。

◎５歳児が中心となり遊びが進むよう５歳児に「スタートの合図はどうする？」と言葉を掛けた。

・ｄ児の思いを受け止め、バトンを一緒に作りながら、自分の気持ちを友達に伝えるために必要な言葉を一緒に考えた。

◎友達に気持ちが伝わるように落着いて話すよう知らせた。他の幼児にはｄ児が伝えたいことがあるので、話を静かに聞くことができるようｄ児に注目させた。

図６　忍者リレーを楽しんでいる場面

図７　新たなチームを作りたいと提案している場面

【教師の見取り】

・５歳児は自分の思いを出しながら忍者の修行コースを作り、忍者になり夢中になって遊んでいた。
・忍者の修行コースでの遊びでは、５歳児が４歳児に優しく教えたり遊びをリードしたりするなど自信を持って遊ぶ姿が見られた。
・忍者リレーの場面では、４歳児の思いを教師が受け止め援助したことで、その思いを４歳児が自分の言葉で友達に伝え、５歳児もその思いを受け入れたり認めたりすることができた。

＜事後の活動＞

環境の構成の工夫：共通のイメージを持てるようにするために、忍者の絵本や忍者屋敷作りに必要な材料を用意した。

幼児の姿：５歳児は絵本にあった忍者屋敷に興味を示し、忍者屋敷作りを始めた。それぞれ自分の思いがあり、意見の違いで遊びが中断することがあった。どんな忍者屋敷にするのか話合いの時間を十分にとり、お互いの思いを伝え合ったり納得したりできるように援助した。製作途中に４歳児が見に来て「すごーい！そら組さん、何でも作っちゃうね」など、５歳児の姿に感心するような会話を聞くことができた。忍者屋敷が完成すると、４歳児を呼びに行き、一緒に遊ぶ姿が見られた。

４　考察

○　「忍者」という幼児がイメージしやすいものを遊びに取り入れたことで、個々の幼児が自分なりの忍者になり夢中になって遊んでいた。その姿を見て、４歳児は５歳児の遊びを模倣したり興味を持って遊びに参加したりした。また、５歳児が４歳児を思いやる姿も見られ、更に関わりが深まった。

○　教師が幼児一人一人の思いを受け止め、幼児同士の思いをつなげるような言葉掛けをしたことで、５歳児は自信を持って自分の思いを伝えたり４歳児の思いを受け入れたりしながら遊びを進めるようになった。４・５歳児が互いに認め合い、人との関わりを楽しむ姿が多く見られるようになった。